

Ⅲ. 「会」の当面の研究・執筆課題（2022.5 全面改定）

2022年改定以前のこのページでは、かなり細かい課題を列記していました。

今回、大きな課題をアウトラインとして示すに留めます。

A. 「障害関係論原論」の執筆とそのための学習

三村洋明『反障害原論——障害問題のパラダイム転換のために——』世界書院 2010 を出して以降、「『反障害原論』への補説的断章」として「反障害通信」で論攷を積み重ねてきました。それは、本のタイトルにおいても、「障害の社会モデル」を前面に押し出していました。それは、基より過渡の理論に過ぎない、ヘーゲル弁証法概念を援用すればアンチテーゼ（反措定）に過ぎないという自覚はありました。そのことは、「『社会モデル』は「社会」を実体化していると批判していたことでもあります。本の中でも、そのことを止揚する「障害関係論」として既に突き出していたことです。『反障害原論』への補説的断章を書きながら、それを改めてまとめ直し、「障害関係論原論」としてきちんと展開しようという思いが膨らんでいます。実は、これを展開するには、哲学的認識論的深化が必要になるという思いがあり、そういうこともあって、「障害の社会モデル」という比較的分かりやすいことを過渡的に援用しようとしたのです。わたしにとって、「障害関係論」を突き出すには、わたしが認識論的に多大な影響を受けた廣松渉さんの「関係性の一次性論」ということからの「障害の関係論」の展開を構想していました。これは、「D.「廣松ノート」の作成と対話の深化」の作業と相作的です。同時にいろんな分野の基礎学習も必要になり、わたしにとって身に余る課題になっています。ですが、誰もそのようなことに取り組んでいません。だから「D.」の作業をしつつ、「断章」整理しつつ、深化させる作業の構想を練っていきます。この執筆が、わたしのオリジナリティで、何とか「原論」まで至らないでも、「概論」なり「序説」なり、最低「草稿」としてまとめ、後の世代への提起にしたいと思っています。勿論、わたしの模索が後の世代には届かず、消えてしまう可能性の方が強いのかも知れませんが、それでも、やれることを、やるべきことをやるとしての作業です。

B. 「反差別原論序説」の執筆とそのための学習

これは、以前書いた「反差別論序説草稿」<http://www.taica.info/adsjs-3.pdf> を深化させる作業です。これも「反差別通信」やホームページで「『反差別原論』への断章」という形で論攷を進めてきました。で、「反差別論序説草稿」の深化的改定作業として、まとめる作業を「反差別原論」として(更には「反差別概論なり「反差別総論」という展開になっていきます)なしたいと思っています。ですが、これは実は膨大な作業になり、その協同作業が必要になります。協同作業を提起してきたのですが、破綻してきました。勿論、求め続けるのですが、それでも独りでもやるべきこと、やれることはやるということで、とりあえず、「反差別原論序説」という形でまとめたいと思っています。

C. 「社会変革への途」の再開（校正しつつの再執筆）

これは、「反障害通信」81号から掲載を始めていたのですが、勉強不足を感じ中断してい

ました。十分に学習をなしたわけではありませんが、これ以上遅らせたくないとの思いで、とりあえず再開します。

わたしの理論はあくまで運動のための理論です。わたしには、「障害者」の立場でも、その他様々な社会に矛盾を感じそれを何とかしたいという思いから運動に参画してきました。そして、障害問題や差別の問題のとらえ返しの中で、差別ということが如何にこの資本社会の基底にあるかをとらえ返してきました。だから、資本主義社会の止揚を宣揚してきました。しかし、そのような運動が、かつての社会変革運動の核心にあったマルクス派の運動が、崩壊的情况です。勿論、マルクスにこだわることはありません。ですが、他にそのような途の可能性がわたしは見出し得ません。だから、まさに真っ正面からマルクス派の運動の総括、それはマルクスレーニン主義と言われてきた運動の総括になるのですが、その作業が必要になっています。これは「B.」とリンクしていて、反差別論からマルクスの理論をとらえ返すという作業になるのだと押さえています。反差別共産主義論としての展開です。

具体的には、「B.」の中に「C.」を含めるのか、逆に「C.」の中に「B.」を含めるのかという問題があり、まだ結論のようなことが出ていません。とりあえず、「社会変革への途」の再開をなしつつ、どうするのかを考えていきます。

D. 「廣松ノート」の作成と対話の深化

さて、最後の難題は、廣松理論のとらえ返しと、そのわずかなりとも継承の作業です。廣松さんは、マルクスを発展的に継承しようとしたひとです。日本語のマイナー性の壁ということがありますが、わたしにとって埋もれさせてはいけない、発展継承させていくべき、活かしたい理論です。そして、その物象化論はわたしの反差別論の鍵になる概念なのです。これまで問題を掘り下げてとらえ返すときに援用してきた廣松理論、とりわけ廣松物象化論を押さえる作業をしないと、そもそも「援用」が反対に混乱をもたらすだけになります。廣松さんに直接いろんな提起を受けたひとでもありますし、基礎学習が貧困なわたしには文字通り「身に余る」作業です。しかし反差別というところからの対話しようとしているひとをわたしは知りません。「やれることを、やるべきことをやる」というところで、敢えてこのことに踏み込みます。これが、他の課題への相作的な作業にもなります。

この作業も膨大な作業になるのですが、途中で終わらざるを得ないということ必然ですので、骨格になる著作を押さえつつ、そこから、各論的に広げていく作業として取り組もうと考えています。